

JOHN DAVIDSON

(貧困と死の詩人)

鳴 沢 寡 愆

INTRODUCTORY

いわゆる90年代の英文壇に開花した新文学思潮については、爾来今日までに加えられた数々の論評を総合してみると、その功罪はほぼ最終的に定まったとみてもよさそうだ。今ここでその主だった特長を項目的に略記してみる。先ず Oscar Wilde に現われた華やかな dandyism, 続いて Arthur Symonds や Ernest Dowson にうかがわれる春雨のような情調主義, それから William Butler Yeats の Irish legends に根ざした清新な作品等々が、この Fin-de-Sièclism の根幹をなす所のものであった。

更にこれ等につけ加えるならば、昔の Arthurian Cycles とか Wilde の一幕物悲劇 Salomé などに題材を求め、英国画壇では珍しい black and white の印象的な作品を発表した Aubrey Beardsley, それからまたその着書の、題名からすでに奇抜な “More” とか “Yet Again” とか “And Even Now” などという、軽妙洒脱な essay 集を発表、また当代文壇の大家達二十五人を槍玉にあげ “Caricatures of Twenty-five Gentlemen” (1896) と題した漫画集を世に送った奇才 Max Beerbohm, これ等異色ある二人の芸術家達もまたその時代の芸文の世界に大きな特色と広さをもたらしただけであった。

他方また同時代の欧州各国の文芸界に広く流行した Decadence とか Aestheticism とか又は Symbolism などという用語とその由来などを調べてみて、それらが英国へ流れ込んで来て定着してしまったその exoticism を明らかにすると、英国の文学がこの時期に於ていかに大きな変革を遂げたかを窺い知ることが出来、その前代 Victoria 朝文学の軌道から丸で

拋物線を描いて飛び去った観があるとさえも言えよう。

I. JOHN DAVIDSON, the Man.

詩人 John Davidson の文壇的活動は正にこの90年代に於てであり、又 London での作家生活をみると、当代の文士達の The Rhymer's Club という集団の member であり、かの名だたる文芸誌 The Yellow Book の寄稿家であったなどの点からして、彼も亦此新文学運動の作家群の一人とみなすことに異論はない。然るに彼の出生と青年としての経歴は紛れもなく Scotchman であり、教育も Oxford ではなく Edinburgh 大学に学んだことなどからすると、純粋な意味で世紀末時代の感覚に住んだ詩人とは一寸断言し兼ねる。殊に上掲の詩人達が大体に於て lyricism を尚び、art for art's sake を信条としていたのに比し Davidson はむしろ art for life's sake の作風を持つ realist であった上に、一面意志を重んじ社会革命家的の信念を抱いている慷慨家であったから、彼一人だけかけ離れた存在であったとも見られるのであった。彼の初期の戯曲 “Smith” の中に見出される次の一節は要するに Davidson の人生観でありその criticism of life であるとみることが出来る。

The hydra-headed creeds, the Sciences
That deem the thing is known when it is named;
And Literature, Thought's palace-prison fair;
Philosophy, the grand inquisitor
That racks ideas and is fooled with lies;
Society, the mud where in we stand... (Act III)

Davidson は一生涯物質上の困窮生活を味わい、いろいろな精神的苦惱を体験して来たのだが、彼の詩で貧乏生活をうたったものに屢々出会うのは即ちそのせいであろう。本文の後段に至って解説する二三の Ballad は概ねそうした苦みから来る悲劇を重要な motif の一つとしているが、比較的初期

の作に “The Thirty-Bob a Week”——一週三十シリング——と題した、安月給取りの侘びしい毎日をうたった一篇がある。

For like a mole I journey in the dark,
 A-travelling along the underground
 From my Pillar'd Halls and broad Suburban Park,
 To come the daily dull official round;
 And home again at night with my pipe all alight,
 A-scheming how to count ten bob a pound. (Stanza III)

彼は郊外のがが家から地下鉄を利用して毎日もぐらのように会社へ通い、味気ない仕事に埋もれ夜になるとまたもや家へ帰って来る。煙管をくわえっ放しにしながら此十志を一磅に生れ変わらせるにはどうしたらよかろうと胸算用している。

1889年文学に志して London へ出て来て雑文を綴って新聞雑誌に送り、又仏文学の翻訳などして辛うじて生活を支えていた頃の Davidson はまさに此作に現わされている通りだったとみてよかろう。

その後文壇詩壇における懸命な努力にもかかわらず生活難は依然として革まらず、加うるに生来健康に恵まれなかった彼は次第に肉体の衰弱を訴えること多く、遂に失望落胆の日々を送るに至った。彼が1907年五十回の誕辰を迎えたとき、わが身の過去を述懐してこんな風に言っている。

Nine-tenths of my time and that which is more precious, have been wasted¹⁾ in the endeavour to earn a livelihood. In a world of my own making I should have been writing only what should have been written.

これは Holbrook Jackson¹⁾ が伝えている詩人の言葉である。

その前年即1906年には年百磅の Civil List Pension が与えられることに

1) Holbrook Jackson: The Eighteen Nineties. p. 180 (London, Grant Richards. 1st Ed. 1913.)

なったが、長年に亘る逆境と病苦¹⁾によって齎らされた彼の **depression** に光明を与えるにはすでに間に合わなかった。1906年彼は家族と共に南英 Channel 海岸西端の小港 **Penzance**²⁾ に引移っていたが1909年三月廿三日失踪したまま再び家に帰ることがなかった。その後六カ月を経て **Mount's Bay** の一漁夫によって彼の溺死体が発見されその遺志にもとづき海へ葬られた。その前年発表されていた “**The Testament of John Davidson**”³⁾ の中で見出される次の一節、

None should outlive his power, ... Who kills
Himself subdues the conqueror of kings:
Exempt from death is he who takes his life;
My time has come.

これは自ら自己の運命を予知した言葉と見られている。又詩人の **contemporary** である **James Elroy Flecker**⁴⁾ は “**John Davidson**” と題した一文の中でこんな言葉を遺している。

I think he felt, too, that his muse was dead. He imagined, rightly or wrongly, that his health was undermined. He had been a brave man all his life, and he was brave enough to commit suicide. As his body could not at first be found, the British public heard, for the first time, from their newspapers, that there was a poet called **John Davidson**.⁵⁾

-
- 1) 持病は **cancer** であったと伝えられている。
 - 2) **Penzance** (*penzæns*[-zæ:ns])
 - 3) 外に **The Testament of a Vivisector** (1901) ; **The Testament of a Man Forbid** (1901) ; **The Testament of an Empire Builder** (1902) がある。
 - 4) **James Elroy Flecker** (1884-1915) : **An Oxonian** ; was in the **British Consular service**. His works : “**Collected Poems**,” “**Collected Prose**,” in the latter of which the above mentioned essay is to be found.
 - 5) **James Elroy Flecker** : **Collected Prose**. p. 213 “**John Davidson**” (London, **William Heinemann** 1922)

II. "A BALLAD OF HEAVEN"

Davidson の作品は dramatic であると Flecker が喝破している。それは彼の文界への debut 作が "Bruce : A Drama" (1886) であり、続く作品が "Smith : A Tragic Farce" (1888) であり、何れも drama であったという事実だけのことではない。"Fleet Street Eclogue" 二巻によって表明されているその eclogue という詩形も short poem, especially pastoral dialogue (P. O. D) と解説せられ、一種の drama 的と言うことが出来るし、更に彼の傑作を集めている Ballads も、晩年の作である一連の Testaments も共に drama 的色彩の濃いものだという事実を併せ考えると、Flecker の言葉が全的にうなずかれる。だから以下 Davidson の有名な Ballad 数篇を鑑賞するのは、彼の詩性の大切な一角に直接触れつつ歩むことになる訳だと言ひ添えることが出来る。

いま一つ、芸術の各部門についての Davidson の信条と執心と帰結とは此等の Ballads に力強く歌われていると見るべきである。この "A Ballad of Heaven" では先ずある作曲家の芸術精進がとり上げられている。

身にはつづれをまとい、飢餓に苦む妻子を抱えつつ己が芸術に邁進している此作曲家は、こうした窮乏のどん底にあってもなおその創意衰うことなく、星の煌く真夜の空を仰いでそこに幻の如く描き出される楽曲をとらえ、やがてこれが完成の日へと撓まざる前進を続けている。だが貧苦に苛まれて日に日に身心の衰えを見せている最愛の妻と子は、隙間洩る風も冷たい garret で永遠の眠りについてしまった。

一方わが労苦が報いられ楽曲が完成し、やがて三つの great orchestra として発表される日を待ち焦がれる作曲家は、そこに横たわる妻子の亡き骸を前にして、今更のようにこの尊い芸術の犠牲を悼み、芸術の勝利と人生の痛苦との dilemma に血涙をしばるのであった。挙句の果てに彼は肉身への愛も生の希望も失い、また生命をかけた音楽にも絶望するに至り、わが命そのものを呪いつつ、やがて彼もまた神の手に導かれ天堂の門をくぐってゆ

く。すると先に天国に在って神の祝福に生きていた妻と子とは、天国へ昇る階段に立って彼を喜び迎えたのである。

They clad him in a robe of light,
And gave him heavenly food to eat;
Great seraphs praised him to the height,
Archangels sat about his foot.

God, smiling, took him by the hand,
And led him to the brink of heaven :
He saw where systems whirling stand,
Where galaxies like snow are driven. (p.77)

宇宙の静寂が戦慄し時の運行が停止したと思う間もなく、彼が地上に於て苦心惨胆創作した楽曲が *adagio* として又 *andante* として、そして最後に *scherzo* の軽快な曲として、そのまま此天界に響き亘って来た。彼はわが耳を疑った。だが

God Said 'Even so;
Nothing is lost that's wrought with tears:
The music that you made below
Is now the music of the spheres.. (p.78)

「涙を以て作られたるもの断して失われることなし、汝が下界の困窮にうち勝ちて作りたる楽はこれ天上の楽なり」という神の言葉の中には、芸術の創造は作者の深刻な苦悩につながるものであり、人界の苦痛をわが身の苦痛として体験したる境地より生れたる芸術こそ最高最大であり神の祝福をうけるものだという Davidson の信念を表明している。

III. "A BALLAD OF AN ARTIST'S WIFE"

この一篇に歌われているのは、俗世間を超越し絵画の制作に専念している一画家の場合である。

惨めな生活苦と闘いながら夫に侍き子供を養育してゆく天晴な妻の瞳からは日に増し若き輝が失せ、時ならぬ老衰の兆すらも現われ初めた。嶮しい世の無情を憤り、報いられること少き芸術に絶望すると共に、一方では此俗界に敢然と飛びこみ、自分の芸術を開拓して行こうと決意するに至った。

I must escape this living tomb !
 My life shall yet be rich and free,
 I would encounter all the press
 Of thought and feeling life can show,
 The sweet embrace, the aching stress
 Of every earthly joy and woe;

And from the world's impending wreck
 And out of pain and pleasure weave
 Beauty undreamt of, to bedeck
 The Festival of Doomsday Eve. (pp.10, 11)

俗世間には夜となく昼となく **wine, woman and song** に没頭する狂態が見られる。永遠の芸術を産む尊い情熱も一瞬のうちに浪費せしめられ、高鳴る胸の鼓動は遂に彼の全生涯の破滅にさえも追い立ててしまおう。そんな生活の中ですっかり変り果てた画家の生活を詩人はこんな風に歌っている。

The sun began to smoke and flare
 Like a spent lamp about to die ;
 The dusky moon tarnished the air;
 The planets withered in the sky.
 Earth reeled and lurched upon her road;
 Tigers were cowed, and wolves grew tame;
 Seas shrunk, and rivers backward flowed,
 And mountain-ranges burst in flame. (p.12)

敬虔な魂の持主である妻は此事態に一切目もくれずひたすら家事にいそしみ、あるいは富貴の人に仕えて生計の資を得て子供の養育に専念している。

だがこの労苦も報いられることなく、やがて視力も衰え力も尽き果て、遂に
 “Tell him, I fed them while I could” という言葉を残したまま永久の旅
 路についてしまった。母を失った幼児たちも我欲の冷たい風が吹きすさむ浮
 世の荒波と戦う術もなく、次々と母の後を追ってしまった。此事を聞き知っ
 た画家はさすがに暗然として

‘Dead!

All dead in hunger and despair!

I courted misery’ he said;

‘But there is more than I can bear.’ (p.13)

かかる悲みの中から生れた彼の絵には、恰も魔力によるかのような美が現
 われ、人々は今更らのように讃嘆の声を放ってこれを迎えた。そして涙を血
 汐に混じ、苦悶から美を織りなすことの出来る人だとたたえたのである。

所が此画家もやがて天堂界に入ることとなった。そこで彼は先ず白銀の王
 座にある一人の聖霊の前へ導かれ、その誰であるかを天使にたずねる。する
 と「彼女はただ一つのよき資性を持ったに過ぎない。こよなき美しさがそれ
 である」との答えが返って来た。続いて黄金の座を占める女が “a simple
 maid who spent her life in charity” であると聞かされ、最後に **diamond
 throne** に座し得も言われぬ祝福をうけている女の前へ来ると、此比類なき
 魂への讃辞が天界の凡ての人々の口から声高に洩れ聞こえ、 **God** すらも

In misery her lot was cast;

She lived a woman’s life, and died

Working My work unitil the last. (p.17)

とたたえる。この女性こそ誰であろう。先きに昇天した彼の妻であった。画家
 は地上の生活で彼女に強要した犠牲に対する悔恨から、われを地獄へ送りた
 まえと神に嘆願する。然し神はこれをとどめて曰う。

No; here shall you stay

And in her peace for ever dwell. (p.17)

IV. "A BALLAD OF A POET BORN"

生来豊かな詩魂に恵まれた人であっても、この地上でその天分を發揮してゆくことのいかに難事であるか、だがまたかかる天才は必ずや機を得て美しく開花せずには居られない、此作の **motif** はここにあるのだ。

ある **Ember Eve** の饗宴で一同が歌い且つ弾じつつ歓を尽していると、一人の紅顔の青年が起ち上り、これまで誰ひとり耳にしたことのない素張らしい歌をうたい出した。彼は野の花川の流れを求めて止まず、真昼の夢を追い、夜は海沿いの洞窟に宿り、あるいは海に船を浮べ風と波と星とを友とするという、いわば放浪の青年であった。暁と夜と真夜中と真昼とをうたう所の今宵の歌は、恰も麝香の如き甘美な歌詞であり曲であった。会衆は驚嘆しつつ **We have a poet born!** と呼ぶ、そして広く世界を遍歴して更に詩人としての技を磨き大成するよう努力せよと説き勧める。

青年の父はすでに世を去り、残された母は憂愁にとざされ、又三人の妹は飢に泣くという窮状で、一家の生活を支えゆく全責任が彼の双肩にかかっていた。だから今宵人々の激励にもかかわらず、それに応ずる訳にはゆかないと答え、一同は彼を怯懦と罵り **some false philistine** と責める。青年は更にその恋人の許をさえも去り、牧畜と農耕とに志し、乏しい経験に頼ってその家業に専念して行った。彼の **harp** は次第に錆びつき、心も手も日増しに強張って行った。

The wine of life was turned to gall

Because the song was marred. (p.62)

やがて母もまた此世を辞し、妹達もそれぞれ貧しい人々に嫁して行った。今や若さを失いやつれ果てた彼は再び **harp** を手にし「夜が明くれば明るくなる、今こそ起ち上って出掛けよう」とてわが家を後ろにした。間もなく昔の恋人に会って彼は語る。

My Kin have left me; it is time

To win the poet's name;
Homeless and poor, but rich in rhyme,
I go to conquer the fame. (p.64)

「曾ては世のいかなる乙女にも増して君が心の王座を許したまいしこの妾のために、別れの前の一時を甘き恋の歌を賜われかし」と哀願する女の望みに応え、彼は節くれ立った手をあげ、錆びついた絃を掻き鳴らした。然し彼の唇は徒らに震えるのみで歌をなさず harp は昔日の如く銀音を響かせることはなかった。男は少年の如く顔を赤らめ項垂れるのみであった。そして Hell has begun, I feel its blaze. と歯をかみしめて呟く。女も熱い涙を流し「死に至るまで一生を契らん」という。

'Sweetheart', she pled, 'we can unite
Life's torn and revelled weft;
We yet may know love's deep delight:
I have some beauty left.' (p.65)

男は歌をも愛をも共に失ってしまったと、絶望の声を放ち harp を折り、すでに日の没した西の空をさし、夕影の暗くなりまさる平野を走り去った。

それから更に幾度目かの Ember Eve がめぐるって来た。饗宴の席に見知らぬ老人が雑っていた。やがて一人の青年が起ち上り、新らしい美しい歌をうたった。それは「運命の水車に挽かれてゆく人間という穀類」を歌ったものであった。しかも其上偽善的な世を呪い人を呪うものでもあった。

Beneath the sun it [=the earth] froths like yeast;
Its fiery essence flares;
It festers into man and beast;
It throbs with flowers and tares.

Behold! 'tis but a heap of dust,
Kneaded by fire and flood;
While hunger fierce, and fiercer lust,
Drench it with tears and blood. (p.67)

人間は徹頭徹尾物質に外ならぬ、魂などというものはないと放言する。人々は手を打って青年の痛快な罵倒を喝采するが、件の老人だけは震える手で **harp** を掻き鳴らして歌う。それは夜明と夕闇、真夜中と真昼、地獄と天国、時と潮、冬の風と春の訪れ、緑の夏と葡萄酒の秋、そして更に人間の愛と自然の恩寵との歌であり、一座は彼の神技に魅了され、彼こそは真に **poet born** であるとなし、その頭上に月桂樹の冠を与えよと叫ぶ。然しそれは輝やかしくして同時に悲しい一瞬であった。詩人が歌い終ると共に彼の魂は肉体を離れて昇天したのである。

Dead, while upon the pulsing string
 Still beat his early rhyme—
 The song the poet born shall sing
 Until the end of Time! (p.71)

名曲誕生に至るまでの芸術心の起伏を力強く歌っている一篇というべきである。

V. “A BALLAD OF A NUN ”

男女の愛欲、若しくは霊肉争闘の問題を主題としたこの “A Ballad of a Nun” は彼の異色ある傑作と言われている。

広い平原を見おろすとある丘陵にうち建てられた修道院に、年若い一人の尼僧が過ぐる十年間ひたすら **a bride of Christ** として清らかな毎日を送って来た。院長の信任も殊の外厚く大切な門衛の役も仰せつかっている。だが若き血潮みなぎる人間本然の欲望は時あって頭を拾けて来る。

Sometimes it was a wandering wind,
 Sometimes the fragrance of the pine,
 Sometimes the thought how others sinned,
 That turned her sweet blood into wine.

Sometimes she heard a serenade
 Complaining sweetly far away :
 She said, 'A young man woos a maid';
 And dreamt of love till break of day. (pp.53, 54)

許されない望みを蔵するわが身の罪の恐ろしさ、尼僧は気も遠くなるほどわが肉体を鞭うつのであるが、その red sin は容易に消ゆべくもない。かくするうち Lent の祭が近づき雪に覆われた山野の彼方には都会の夜の燈火が彼女の心に怪しい悸めきを覚えさせ、 Carnival の笑いさざめきが途切れ途切れの楽の音に乗って聞こえて来る。彼女の飢えたる心は都会の誘惑に呑み込まれてゆく。

'Heaven save me by a miracle !
 Unless God sends an angel down,
 Thither I go though it were Hell.'

She dug her nails deep in her breast,
 Sobbed, shrieked, and straight withdrew the bar:
 A fledgling flying from the nest,
 A pale moth rushing to a star. (p.55)

かくして彼女は心内の嵐に押し出され僧院を忍び出る。 I shall taste of love at last! と叫びつつ狂気の如く雪の広野を駆けてゆく。傷ついた足から流れる鮮血は氷上に赤い印を残すのであった。城門に駆けこむ尼僧は殆ど半裸となり目は炬火の如く輝く。人々は瞠目して彼女の後からついてゆく。一人の青年が声をかける

'Strange lady, what would you with me?'
 'Your love, your love, sweet lord,' she said;
 'I bring you my virginity.'

He healed her bosom with a kiss;
 She gave him all her passion's hoard;

And sobbed and murmured ever, 'This
Is life's great meaning, dear, my lord. (p.57)

神への誓いを破った彼女は何の悔ゆる所もなく、今やこの **Belmarie** の町々を恰も女王の如く濶歩するその姿を見送る人々は、妖精の国から来た女か、それとも **mermaiden** か **ghoul** かなどと噂し合うのであった。

所が女の情熱が汐の如く引き去り、その美貌が見るかげもなく衰え艶やかな金髪が白髪と化する日が余りに早くやって来た。真夜中に覚めて此現実のうちひしがれた彼女は、**"I have had my will."** と嘆じ、曾てのつづれを身にまとい再び元の僧院へ帰ろうと意を決する。

She ran across the icy plain;
Her worn blood curdled in the blast;
Each footstep left a crimson stain;
The white-faced moon looked on aghast. (p.59)

今僧院の門に行つ **wardress** の前にひれ伏した彼女は「罪を洗い清めんがために帰り来りしわれ、ここに石の牢に閉じ込め給わるよう」と懇願する。その女人は優しく尼僧を労わりその涙の目に手を触れ「わが姿を見よ、そなたに代って此務めを神より委ねられた妾は即ち **Virgin Mary** なり」との言葉に驚愕する尼僧に対し昔と同じく腕環をつ け **veil** をまとうのを手伝った後、

You are sister to the mountains now,
And sister to the day and night,
Sister to God.' (p.61)

と告げ、三度彼女に接吻しかき消す如く何処ともなく走せ去った。東の空が赤らみ、山々の幸福な頂には黎明のバラ色が濃くなって行った。

Bernard Muddiman¹⁾ はこの **Ballad** の尼僧の不敵な独白、即ち

1) **Bernard Muddiman** : *The Men of the Nineties*. (London, **Henry Danielson**, 1920 : p. 93)

I care not for my broken vow;
 Though God should come in thunder soon,
 I am sister to the mountains now,
 And sister to the sun and moon.¹⁾ (p.57)

を引用し、これは画家 **Beardsley** が好んで描く所のかの罪もて青ざめ贅沢もて肥臍している女性を思わせるとのべているのが **Jokanaan** の首を銀盆にのせて飽かず眺める **Salomé** の半裸の絵など正に然りである。但し **Davidson** の描く女性が終りに至って一様に神に帰ってゆくのは、彼が **Evangelical Union** の牧師を父として来たからかも知れない。

FPILOGUE

Davidson は、英吉利の文学史家や評論家が詩人の評価についてしばしば用いる、いわゆる **minor poets** の中へ分類される一人かも知れない。だが詩人の業績に序列をつけたり分類したり、さては **minor** であるとか **major** たとかとまるで商品に価格札をべたべた貼りつけるような凄じい快拳を敢てして以て足れりとしているのは、凡そ文学に対する極めて底次元の態度と言ってよかろう。文学作品を真に **appreciate** しようとする人にとってそんな事は実はどうでもよいことなのである。文学芸術の世界での **criticism** とは裁判官が行う犯罪の裁定というようなものではなくて、**criticism** はその前段活動として大切な **appreciation** を経過しこれを血とし肉として行かなくてはならない。**Davidson** とほぼ同時代の **Arthur Symons**²⁾ が第三詩集“**London Nights**” 第二版の序文の中で

I have been attacked on the ground of morality, and by people who, in condemning my book, not because it is bad art, but because

1) cf. Stanza XXVIII (quoted above.)

2) Arthur Symons (1865–1945), a poet and critic, whose collected poems appeared in 1902.

they think it bad morality, forget that they are confusing moral and artistic judgments, and limiting art without aiding morality. I contend on behalf of the liberty of art, and I deny that morals have any right of jurisdiction over it. Art may be served by morality; it can never be its servant.

と甚だ激越な口調で抗議しているのはまさにこの点である。末尾にある「道徳は芸術を支配する何等の権利もない、芸術は道徳によって奉仕されることはあろうが、断じて道徳に仕える下僕たり得ない」は道学者への痛棒と申して差支えない。

最後にこれも Davidson の友人 Richard le Gallienne が Davidson の全作詩に対して下した温い appreciation の一節を引用して此文を終ることとする。

His was a noble nature, and his death was a real loss to literature, as well as to his friends, for he was in stature perhaps the biggest of all the poets of the '90s, and had in him the greatest potentialities of a many-sided genius, at once poetic, dramatic, and fantastic. His "Ballad of a Nun"—with such unforgettable lines as.

I am sister to the mountains

And sister to the sun and moon—

had a larger accent than any other poems of his time, as his "Fleet Street Eclogues" had a spontaneous loveliness in its rural pictures such as will be found nowhere else. In his combination of modern realism with beauty, the apprehension of beauty, that is, in contemporary realities, as in his note of revolt against conventional hypocrisies, and his vindication of the free play of human vitality, he was expressive of the best energies and ideals of the 1890 Renaissance.¹⁾

1) Richard le Gallienne. (1866-) : "The Romantic 90 s." (London. Putnam. 1926) pp. 152, 153.